

《文献解題》

なぜギリシア人は神々を信じたのか

—— Robert Parker, *On Greek Religion* における「ギリシア宗教」のありかた ——

山 内 暁 子

はじめに

Robert Parker, *On Greek Religion*, Cornell University Press, 2011 は、著者にとって四冊目のモノグラフ。オックスフォードで長くギリシア宗教史研究に携わり、周到な文献調査に碑文史料を巧みに配した緻密で構築的な実績によって知られている。その著書においては、*Miasma: Pollution and Purification in Early Greek Religion*, 1983 のタイトルに「初期ギリシア宗教」という表現が見られるものの、*Athenian Religion: A History*, 1996, *Polytheism and Society at Athens*, 2005 では、ボリス「アテナイ」がその外枠に設定され、「ギリシア宗教」は意識的に退けられている。Parker の著作および古代ギリシア宗教史研究における「ギリシア宗教」と「アテナイ宗教」については、『西洋古代史研究』第8号（2008 年）において、*Polytheism and Society at Athens* の紹介として概略を記してあるので、そちらを参照して頂きたい。ギリシア宗教史の権威である著者によって、つとめて避けられてきた「ギリシア宗教」という枠組み。「アテナイ宗教」のようなボリスの政治と歴史、社会に結びついた宗教こそが、歴史的考察の対象である。概念上の総体「ギリシア宗教」は実態とかけはなれている…というのが著者の主張であったが、あえて「ギリシア宗教」をタイトルに据えた本書の意図はどこにあるのだろうか。正確なタイトルは「ギリシア宗教について *On Greek Religion*」。表紙も、背表紙も、ON の文字だけ小さなサイズで印刷されていて、目を引く。初めて著者がギリシア宗教「について」真っ向から取り組んだ試みである。

論争的なテーマを提示して、議論を進めるのが本書の特色だ。これまでは簡潔な本文と詳細な注によって古代ギリシア社会をあたかも「再現する／再構成する」かのような綿密な考証が常であった。注をひとつ読むだけでも、まとまった議論や批判が成り立つほどだ。批判的に言えば、重層的に過ぎており、とっつきにくい。コーネル大学でのタウンゼント講義に基づくためだろうか、本書は史料や参考文献からの引用が本文に組み込まれ、通読しやすいのが特徴だ。では、最初に各章のテーマを紹介する。

1. Why Believe without Revelation ? The Evidences of Greek Religion
2. Religion without a Church : Religious Authority in Greece
3. Analyzing Greek Gods
4. The Power and Nature of Heroes
5. Killing, Dining, Communicating
6. The Experience of Festivals
7. The Varieties of Greek Religious Experience

「ギリシア宗教」の特徴である欠如から話は始まる。預言者も、教典も、そして教会も存在しない。では、なぜ人々は神々を信じたのか？それはどのような方法で？神々／半神とはどのような存在だったのか？第四章までは、ギリシア宗教のシステム、あるいは信仰の在り処を考察するための、意義深い試みだ。とりわけ第一章は最も密度が濃い。それでいて「ギリシア宗教」が語られる時に典型的な問題の立て方、回答を避けている。特定の結論を導き出すための予定調和的テーマ設定ではないのだ。第一章と二章で提示された結論をもとに、第四章までの各論で「ギリシア宗教」の登場人物が検討される。古代ギリシア人にとっての「神的なもの」「聖なるもの」の定義一覧とも言えるだろう。ただし、これまでのギリシア宗教史における定番であった神々、英雄のカタログは一切無い。この宗教のエッセンスは何か、ということを見つめ続ける著者の誠実な試みに従って行くことができる。次に「ギリシア宗教」の核とも言われる儀式、供犠がテーマとなる。ここまでが「理論」の章。理論立てが済んだら、次は人々の「経験」についてである。祭儀と宗教体験の幅広さが最後の二章で語られる。本稿は、主に理論によって「ギリシア宗教」の枠組みを明確にしようと試みた部分を中心に紹介、検討したい。宗教史の専門家に限らず、ギリシア人の生活と歴史に興味を寄せる人々すべてに訴えかけるような重要な指摘が、いくつかなされているからだ。

序言において方法論が示されるが、それは以下二点である。まず、考古学者や古典文学者とも議論ができるような論点を明確にすること。そのためには共有されるべき 'theory'、あるいは問いが必要だ。また、エヴィデンスには優先度があり、実りをもたらす領域の探索の必要性を指摘する。古典学に携わる者が共通して考察すべきテーマを、史料に恵まれた時代、地域から着手すること。断片的になりがちな古典学の成果を、より高い次元で結実させることは、西洋古代史に関わる研究者全体が抱える問題の改善ともなるだろう。そこで最初に取り上げられたテーマは「啓示がないのに、なぜ信仰が成立したのか」である。いかにも預言者宗教の世界観から発された問題のようだが、ここでは「啓示」に代わるギリシア宗教の支柱としての「神話」、また「神話」以外にギリシア人が信仰の支え、あるいは神々の存在のエヴィデンス（証し）としたものは何だったのかを掘り下げるための導入に過ぎない。

1. 神話と信仰

そもそもなぜ神々がいることを、ギリシア人は信じていたのだろうか。人々は素朴に、あるいは経験的に、神々によって「信心の報い」である幸運／不運がもたらされると信じていた。敵、例えば訴訟相手やペルシア人の不幸は「いまや幸いなる神々が」いますことを証明立てている。こうした日常的な感覚とは別個のものだが、宇宙の存在に「神の意思」を見る哲学者たちがいる。宇宙の創造主として神を想定し、「神々によって宇宙が作られているのだから、神々が存在するはずだ」という議論を打ち立てる。哲学者たちの議論が出現するのは、紀元前四世紀を待たねばならないが、「プロノイア（神の意思）」を様々なものの中に認める立場は、市井の人々の生活にも見ることができる。神々によって与えられる兆しと、また人知を越えた不思議な出来事がそれに当たる。神的な原因による特異な現象は、「奇跡」という語彙を持たないギリシア人にも感知できた。半神アスクレピオスは人々を睡眠中に治療へ導き、パーンはマラトンの使者の前に出現する。直感的に神を感じるものが、あらゆることの前提なのだ。

では、全く逆の発想「祭壇がそこにあるのだから、神々も存在するのだ」はどうだろうか。言い換えれば「私たちが信仰しているのだから、神々はいるに違いない」。敬虔の動作を前提とするこの考え方は、儀式中心といわれるギリシア宗教の在り方にフィットしているようにも思える。ただ、著者は「儀式」で行われる行為がギリシア人の宗教観／敬虔を作り上げていた、という枠組みを利用しない。それは当然推測されることとしつつも、神々との交流の重要性を示唆する。著者が重視するのは宗教的な「経験」である。伝聞であれ自らのものであれ、「経験」を神の存在証明の中核に据えるのが、ギリシア人の特色なのだ。儀式を執り行うことも神々との直接的な交流の「経験」であるから。

「啓示」ではないものの、神からの直接的な働きかけとして「神託」がある。このような「限定的な」啓示は、それだけで宗教システムを常時維持できるものではない。しかし、神託を伺う習慣は、神々の存在を継続的に証拠立てることにつながる。ギリシア人にとっては神の存在は当然の前提であり、それを疑問視する立場こそが奇異であったのだ。「神とは何か」という根本的な問いかけは、紀元後二世紀のクラロスのアポロン神への神託伺いまで見られない。神々を喜ばせる方法は問われるべきだが、一体神とは何なのか、とは知る必要もないことなのだ。奇跡や啓示というドラマティックな現象によって支えられる宗教とは違って、ギリシア人の信仰は継続的で日常的な経験である儀式や神託伺いにより、その場その場で確認されるのだ。

啓示も聖典もないのがギリシア宗教の特徴である。聖典あるいは中核となる教義の不在はそれでも、「本」の不在を意味しない。しかし実際の儀式で「本」が参照されるのは、どちらかといえばマイナーで秘儀的な祭祀である。「本」が権威を肩代わりするのだろう。それ以外に重要な「本」といえば、これは何よりもまず神話である。ギリシア宗教にとって不可

欠なテキスト、神話についての分析が次の課題だ。神話が語られるコンテキスト、神話と宗教あるいは信仰という、本書の中心テーマが扱われる。

神話はどこで語られたのか。ギリシア宗教において儀式が重要であるならば、神話はそれに付随するものだったのか？しかし「ヒエロイ・ロゴイ（聖なる物語）」と儀式の結びつきが強い秘儀をのぞいては、神官／女神官が信者と神話を共有する場は見られない。神話と儀式は *Sitz im Leben*（生活の座）を異にし、祭祀外コンテキストにおいてこそ、神話の意義は増すのだ。では、神話とはギリシア宗教においてどのように位置づけられるのか。

ギリシア史研究の創成期には、神話こそがギリシア宗教思想を伝えるものであり、神話研究こそが宗教史家の仕事であった。しかし19世紀末には神話から儀礼へ重点が移行した結果、神話は儀礼と別個の研究領域とされ、そもそもギリシア神話は議論の土台とすべき整合性のある領域ではない、という認識も出現した。では「神話なき祭祀」がギリシア人の宗教の場であったのか。確かに神話は儀式に必要不可欠ではなかったが、神々に形を与えるのはやはり、神話以外にない。神話が曖昧で不安定なものとされる根拠は、縁起物語としての神話が、あまりに多く派生し、展開したことにある。人為的で時代を経るにつれて増える縁起神話は、単独の儀式／祭祀についても相互矛盾するものが多く存在する。しかし、著者は重要な点をひとつだけ指摘する。これら無数の縁起話（アイティア）の役割は、あらゆる縁起を神話／英雄時代へと遡らせることである。ギリシア宗教においては、祭祀に正当性を与えるのは、預言者による「啓示」ではなく、神話によって支えられた「伝統」なのだ。著者は「あらゆる定義づけを排除するギリシア神話」という言い方を撤回し、代わりに「伝統形成のための物語」という定義を据える。「啓示」に代わる役割を担う神話、そして神話による「伝統」形成がなければ、儀式と信仰も根無し草となるのだ。ギリシア神話は正典が存在せず、神話群は無限定の広がりを持ち、その評価は分裂する。しかし、そのようなカオス的な状況への視線よりも、「伝統」形成のための神話という前提の必要を説いたことは、意義深いだろう。

神話は儀礼の前提であった。では、儀礼と信仰の関わりはどうだろう？実は「儀礼と信仰」は「神話と儀礼」よりも古くからある議論で、著者は17世紀のフォントネル『神託の歴史』をその例とする。ギリシア人は神々の存在については、ある確信を持っており、それに基づいて祭祀が行われた。しかし、ヘロドトスも指摘することだが、神々に関しては、誰しも似たような知識しか持たない、つまり知らないのだ。人間が思いを巡らしても、しよせん不死の神々の意図は不可知である。神話は不安定で変動する像を提示するのみで、神託は儀式次第を指示するものの、神々についての情報を与えない。とすれば、安定した性質で祭祀の要となり、ために統制可能な要素とは、儀式しかないのだ。では、ギリシア宗教はやはり実践主義なのだろうか。フォントネルは信心に無関心なポリスでは「*Faites comme les autres, et croyez ce qu'il vous plaira* : 皆がするように実践し、好きなように信じる」と述べた。

ギリシア宗教を「単なる儀式主義」と判断してよいものか。例えば「聖法」は信者にど

うすればよい（儀式手順）を指示するもので、何を考えるべきかには触れない。しかし、ここから神々についての思索がなかった、重要でなかったという結論を出すべきではない。著者は現代の用語とギリシア人の概念を安易に対応させることに疑問を呈する。例えば「宗教」という言葉は、ギリシアには存在しなかった。私たちは、いままで200年間もギリシア宗教について論じてきたというのに！翻って、「信仰」よりも儀式について述べられるから、信心がないと言えるのだろうか。「タ・テイア（神々にかんすること）」について、私たちは何を含め、何を捨てるべきなのだろうか。

神は「知りえないもの」であり、その神話も無限定だ。そしてまさにその理由によって、本質的なものとなり得る。言葉や図像では描くことのできない、知り得ないものを表現するのが神話である。神話とは、知り得ないが強烈に感じられるものの形象化であり、それこそが他のすべての源なのだ。著者はここで「知りえないもの」と神々／神話を定義し、「儀式主義」は安定した要素としての儀式への固着であり、「信仰よりも儀式」と同意でないと指摘する。二極的な「儀式か信仰か」という議論になりがちだが、「神話」を足がかりに再検討することで、本質と周縁の分離に成功したと言える。確固たる儀式はあくまで「知りえない」神話を分節化し、明示するための手段に過ぎないのだ。

ギリシア人は直感的に神の存在を信じていた。では、神とはどのようなべきだと考えられていたのだろうか。これは主に、哲学の領域の問題となる。神々について、どのような物語が信じられるべきか検討され、神のイメージが倫理的に再構成されるのだ。哲学者からは批判的な見解も出されるが、基本的には犠牲式と伝統を遵守する立場が取られ、宗教の実践には影響力を持たなかったようだ。では、哲学者たちの神に対する言論は、全く等閑視されていたのか。ギリシア人はプラクシス（儀礼行為）については正当性を主張するが、ドクサ（信仰）については正統の概念を持たなかったというのが、本当だろうか。ソクラテスは伝統的な神々を認めなかった、と裁判において訴えられたが、それに対して友人クセノフォンは、ソクラテスが日常的に供儀を行っていたことを敬虔の証とする。やはりドクサよりもプラクシスの問題なのだろうか。著者は次のように回答する。神々が存在するという根本的な信仰の問題について批判がなされるならば、それは見過ごされるべきではなく、アセバイア（不敬罪）として公的な訴訟の対象となった。その意味で古代ギリシアに「言論の自由」はない。また、儀式さえ行っていれば、どんな考えを抱いていても問題ない、というのも誤りだろう。エピクロス派や自然学者たちに加えられた社会的制裁が、それを明らかにしている。ただし、神々についての特異な考えを「entertain 心に抱く」のは特に問題ではなく、「propagate 公に問う」ことが咎められたのだ。アリストデモスは偉大な神々が人間の事柄に拘泥するはずがない、と考えて儀式も神意を伺うこともしなかった。このような人物と嵐の中の船に乗り合わせるの嫌だろうが、ふだんの生活なら無害な奇人と見なされるだけだろう。

ここまでの第一章の内容であり、本書の核となっている。第二章から五章までは「宗教的

権威」「神々」「半神」「供犠」をテーマとして、「ギリシア宗教」のさらなる定義が検討される。西洋世界においてキリスト教が勝利を収めたのは、教会と聖職者の組織化によるところが大きく、国家を宗教が規定するまでに発展した。古代ギリシアでは、大変な権威を誇るデルフォイの神託ですら、ポリスに対する強制力は持たなかった。教会のない宗教において、一体何が権威となり得たのだろうか。思索的な内容であった冒頭部と変わって、具体的な碑文史料の検討をきっかけに、次の議論が展開していく。

2. 宗教的権威

紀元前三世紀、ミレトスにおいて祭祀の財源確保のため、アポロン神への神託伺いを民会が決定したことを記す碑文がある。とりわけて史料的価値の高い、名高い碑文ではなく、日常的な／平凡な民会の決定事項を示す。登場する行為主体として注目すべきは「民会」と「スキリダイ」である。民会は政治機関であるから、宗教的な事柄は「スキリダイ」の人々に任せるのだろうか？そうではなく、主要な働きをするのは「民会」であり、神託伺いも、その決定を遂行するのも民会だ。教会のような仲介者を経ずに、直接神へ伺いを立てるのも、ギリシアの神託の特色だろう。さらに、日常的な様々な事柄については、神託伺いもせずに民会が決定を行うことが当然であった。では、一見して宗教的権威を帯びているように見える「スキリダイ」とは、何を担う人々であったのだろうか。

スキリダイは、ミレトスでアルテミス・スキリティス神の祭祀に関わる「ゲノス」であったと考えられる。ゲノスとは、世襲的な祭祀集団であり、とりわけアッティカの例がよく知られている。ギリシア人の祭祀は年一回のものが多く、文書化も進んでいない複雑な儀式についての記憶がどうやって保持されていたのかを、このような専門家集団の存在に頼るものと解釈することもできる。しかし、アッティカ以外では、このような集団が常に存在したかは不明であり、また最終決定権を持つのはスキリダイではなく民会であった。碑文では「神事解釈（エクセゲーシス）」についても触れられているが、これも民会に対し強制力を持つことはなかった。世俗的な権力を保持している民会が、宗教的領域でも決定権を維持していたと言える。ゲノスの人々やマンティス（占い師）、クレースモロゴイ（託宣者）も宗教的事柄に影響力を及ぼす可能性が高いが、いずれも決定権は持たず、個人としては政治家が民会に働きかける例が最も顕著であった、という指摘がなされる。

では、神官（ヒエレウス）はどうだろうか？語意からは「犠牲を行う（ヒエレウオー）」者と分かるが、その権威はギリシア人にとっても自明のことだったのだろうか。実際のところ、神官は一時的な役職で、他の役人と共同で犠牲を主導することが多く、その役人との相違もさほど見られない。神官に神と人間の仲介者のイメージを負わせることは、不適当であることが示される。アテナ女神の、あるいはディオニュソス神の神官と呼ばれる者はおらず、アテナ・ポリ阿斯（ポリスを守護するアテナ）などのエピトン（添え名）で役割を限

定された神の、地域的な職務に関わるのだ。著者は聖財が盗まれないよう、犠牲が正しく行われるように管理することが中心職務であることから、神官とはキリスト教で言えば「聖具係」や「教区委員」に対応する存在ではなかったか、と言い添える。確かに、神官はその名前ほどには神官らしくない、と思われる。

古代ギリシアには組織立った教会も、とくに宗教的権威を帯びた人物もいなかったならば、宗教をコントロールする主体は何だったのか。これまでの議論でも出てきたように、それは政治の主体であり、宗教領域を包摂して発展したポリスそのものである。つまり、ポリスと宗教の関係こそが本質的に重要だと言える。1990年に Sourvinou-Inwood が世に問うた "What Is Polis Religion?" 以降は、とりわけ「ポリス宗教」という用語が議論の軸となった。2007年に亡くなった Sourvinou-Inwood とは、本書の最初のアイデアを話し合ったと謝辞に記されており、The Guardian 紙の印象的な obituary を思い合わせると、著者の哀悼歌にも思える章だ。著者はこの論文を「1960年代のヴェルナンとブルケルトの業績以来、ギリシア宗教史研究において最も重要」と評価し、そこに提示された新たなパラダイムについて検討する。

「ポリス宗教」において Sourvinou-Inwood は、パンヘレニックな神話や慣習の存在は否定しないが、宗教はポリスの領域内に限定された特殊性を持つものと主張した。人々はパンヘレニックな聖域に巡礼することもあるが、日常的な宗教活動の組織化、統制の主体はポリスであった。プラトンも個人が儀式や犠牲を執り行うべきでなく、ポリスと神官たちに任せるべきだと述べたが、宗教的な違法行為については、ポリスはどのように対処したのか。「教会」についての議論は、宗教統制の主体としてのポリス、そして「ポリス宗教」の逸脱者であるアセベイア（不敬罪）で告発される者へと展開する。

「ポリス宗教」に対置される用語として elective cult がある。これは「ポリス宗教」の枠組みから自由な、個人が自らの意志に基づいて「選択的に参加する祭祀」のことだ。では、ポリスが統制すべきなのは elective cult の組織者であったのか？ これに対する告発例は、ごく少数しか伝えられていない。一方、アセベイアの対象とする告発領域は広く、例も多い。そしてアセベイアは定義付けが難しい。著者は、ポリスにおける宗教と自由について、以下のように結論付ける。

ポリスは、アセベイアという無限定の告発枠を設けることによって、宗教に対する統制を保持した。'Big Brother Is Watching You' は「ポリス宗教」のスローガンではないが、「宗教の自由」あるいは「レッセフェール」も存在しない。いずれにせよ、国家と宗教を切り離して、どちらかの「統制」のもとに位置づける現代的発想とは相容れない。ポリスの生活慣習の中に織り込まれたものとして宗教生活が成り立っていたのだから。最後に、前古典期と古典期においては、宗教的領域と世俗領域は観念的には別個であったが、分かちがたいものであった。宗教的な権威が力を持つことが全くなかったわけではないが、それは宗教の権威によるものではなく、社会的エリートが政治と宗教の両方で力行使した例と考えた方がよ

い。決定的な変化は、王と官僚たちの時代であるヘレニズム期に訪れる。セレウコス朝では「あらゆる神官の長（アルキエウス）」という立場のものも現れるが、それも王の僕に過ぎない。ギリシアでは神官は人々に仕え、後に王に仕える役職となったのだ。

これで本書の中核部分である「ギリシア宗教」のシステム論はひとまず終了した。次は「神々」と「半神」の登場である。これまでの神あるいは半神ごとの一覧は退けられ、それぞれの本質に迫る分析が続く。本稿の目的は、著者の「ギリシア宗教」分析の紹介・検討であるから、このような意義深い細かい議論には立ち入らないこととする。以下はかなり手短な概略となるが、大きな問題や議論に関わる部分を紹介していこう。

3. 神と半神

ギリシア人は神々をどのように呼んだのか？日常的にはただ「神々」と言及されることが最も多いが、それはギリシア人がある出来事について「どの神が介入したのか分からない」からだ。エピトン（添え名）は文字通り数えきれないほど存在したが、これは儀式のためのダブルネームとも考えられる。神々は名前によって異化されたり（添え名による役割の分担：「アテナ・ポリ阿斯（ポリスのアテナ）」「アテナ・ヒッピア（馬のアテナ）」）、同化されたりした（外国の神について：アメン＝ゼウス、アスタルテ＝アフロディテ）。オリュンポス十二神を筆頭とする人格化された神々だけでなく、自然現象や抽象概念の神格化も見られる。また、通常のパンテオンの中核を構成する「オリュンポスの（天上の）」神々と対照的な存在として「クトニオスの（地下の）」神々というカテゴリーも存在した。日常生活において制御できない大いなる存在について、ギリシア人が名付け続けた結果が膨大なパンテオンに結実しているのだろうか。著者はここで構造主義的な分析へと視点を移行する。

これまでの著作でも指摘していたことだが、著者は神々の役割を箇条書きにしても意味がない、と考える。中心的な権能を抽出すべきであり、それを核とするポートフォリオの作成こそが肝要なのだ。そして、マルセル・ドゥティエンヌが指摘したように「差異と分類」によって神々が定義付けられることもある。ドゥティエンヌの試みた構造主義的分析からすでに40年を経ているが、著者はそこから *mode of activity* という概念をピックアップする。ギリシアの神々は人格的要素によって分類されがちだが、実は独特の *mode of activity* によって区分される。多くの神々は同じ権能や活動領域を持つことが一般的であり、そういった役割のコングロマリットとして捉えるのではなく *mode of activity*こそが境界を作りうるのだ。構造分析は時に非常な成功を収め、曖昧な神々の力を綺麗に整理することもできる。だが、著者はその分析自体は私たちのものであり、ギリシア人のものではないことに気をつけねばならない、と警告する。分析は歴史の説明や解釈には有効だが、それは私たちの道具に過ぎないのだ。「ギリシアの神とは何であるか」に対する回答は困難であり、そもそも神がそういうものであるように、一貫性を欠いている。最後に著者は史料へと立ち戻り、神官の官職

売買リストを掲げる。それはギリシア人の知っている神々の分類方法だ。著者がこれまでに試みた区分は、かなりの程度有効なことが、この無味乾燥なリストから分かってくる。そして、そのリストには神々の他にも重要な登場人物が多数存在する。それは「半神／英雄」たちだ。

半神をキリスト教の「聖人」と比較する試みはしばしば見られるが、決定的な違いがある。聖人はより高次の存在に「とりつぎ」を行う仲介者だが、半神は自ら祈りを聞き、それに答える。半神は、基本的には死んだ人間であるが、ほとんど神と同格に扱われる。著者は半神を「神話的（伝記的）には人間、機能的には下位神格」と分類する。半神はその地域の独自性を反映しやすく、宗教暦では多種多様に出現する。具体的には、男性半神と女性半神が組み合わせられて、供犠の対象となる。近年、半神への信仰は、地域的な祖先崇拜と結びついた「英雄祭祀」として研究されることが多くなった。半神への祭祀がポリス創成期における集団的アイデンティティや政治的ヘゲモニーの確立に寄与した、という議論である。半神信仰にポリス成立の求心力を認める立場だが、著者は敢えてその道は取らず、ストイックに祭祀の状況を追跡する。これまでも「アテナイ宗教」あるいは「アテナイの多神教」について、「再構成」し「提示する」ことが著者のやり方であった。何かを希求するという観点によって、「史実」が歴史家の物語に回収されることを忌避するのだろう。植民市の英雄祭祀と、最近の死者を英雄化することに政治的な傾向を指摘するにとどめている。

4. 供犠

「ギリシア宗教」の根幹が、神々との交流にあるとしたら、その中心はやはり犠牲を捧げる儀式、供犠だろう。だが、著者は犠牲式の「本当の意味」を見出すことには興味を持たない。供犠が普遍性を持ち得た理由について「犠牲式があらゆる人のそれぞれ特定の目的を満たすほどに、曖昧模糊としたものだからだ」と述べるポール・ヴェーヌの意見に、著者も賛成するようだ。中心課題は、宗教史のみならず、社会史や政治史でも継続的に議論されているテーマ、犠牲式の中心を宴会とコミュニケーションに据えるものだ。供犠はシュンポシオンの序曲に過ぎないのか？「肉食のための供犠」という観点は妥当なのか？「ギリシア宗教」の大きな疑問に著者は回答を試みる。

『ホモ・ネカンス（殺す人）』の著者ブルケルトに対して、ドゥティエンヌとの共著でシュンポシオンを取り上げたヴェルナンが述べたことが紹介される。「犠牲式とは食べるために殺すことだ。この枠組みの中であなたは殺すことに、私は食べることに力点を置いたのだ」と。供犠を肉食のための儀式ととらえた場合、その目的は動物の殺害を正当化することにある。確かに神官が「ヒエレウオー（犠牲を捧げる）」の主体だが、殺害の実行犯は神官の持つ刀と考えられていた。神官（ヒエレウス）は、ただ単に「神官の職務を果たす」だけなのである。さらに犠牲の動物は「自ら祭壇へ進んだ」と語られることもあった。ハラールや

コーシャのように、宗教的専門家の手を経た肉だけを食べるのではないが、ある特定の動物の肉は、基本的に犠牲式の後食卓に供される。それでは、犠牲は牛や羊、豚を食べるための儀式であり、人間のソシアビリテ確立のための手段のひとつに過ぎないのだろうか。

儀式とは神々とのコミュニケーションのための「経験」である、と位置づけた著者は、やはり神との接点に着目するように促す。供犠のフォーミュラとして祈りが伴い、祈願とその受け取り手が明示されること。動物はアガルマ「(神に捧げられ) 喜ばせるもの」であり、男神には雄、女神には雌を、クトニオスの神々には黒くて妊娠した獣を、また神と同様に「すべてがそろって」「完全な」獣が供される。それらはすべて、神との交流のためのシンボルなのだ。また、供犠を示す言葉「テュエイン」を見れば、野菜や香もまた「テュエイン」されるのであり、殺害の正当化とは無関係だ。「テュエイン」の受け手は人間ではなく神々であり、供物は人間によって食べられるものではなく、「神々のために焼かれるもの」である。実際、肉を焼くのはそれが「煙となって天に届くように」するためだ。供犠とは神と人との交流を可能にするための、神への捧げものなのだ。シュンボシオンにおいては人間同士の様々な結合関係が生まれた可能性はあるが、供犠は神と人が一時的につながる機会を提供するものなのだ。

おわりに

「ギリシア宗教」について私たちが共有すべき大きなテーマが、いくつも語られた。本書はこの後にも多様な祭祀・宗教経験について論じるが、本稿では「理論」の部分を紹介した。ギリシア宗教の多義性（あるいは、著者言うところの支離滅裂さ）は、「経験」としての祭祀に反映される、という指摘が冒頭でなされているが、「理論」に続く最後の二章では、「経験」の実態が提示される。本書は、これまで「経験」の再構成を主眼としていた著者にとって意欲的な試みであり、古代ギリシア人の世界をより普遍的／現代的な議論の場へと持ち込むものである。最終節の 'What You Will' では「ギリシア宗教」が次のように総括される。神とは何か？人間との関係は？ギリシア人の中では、様々なことが open question のままであった。誰もこのようなことについて語らなかったのだから、誰も知らないのは、むしろ当然である。フォントネルの言葉「皆がするように実践し、好きなように信じる」は、信仰心の軽視を謳ったようにも見える。しかし、このような自由度の高い宗教だったからこそ、ほとんどあらゆる人を排除することなく包摂して発展することができたと言える。ギリシア人の宗教は社会的結合の枠組みを提供し、「見えない世界」とのコミュニケーション通路を開いた。そして「お好きなように」の言葉通り、「見えない世界」について特定の思索を強制することもなかったのだ。

「お気に召すまま」信じなさいという言葉は「幸福にしよう、しかしこれを信じなければならぬ」という警告と共に存在する諸宗教の中で、支配的でない自由さを備えた信仰とし

での「ギリシア宗教」を浮き彫りにする。本書は研究史の中で細分化し、ある意味放置されていた思考過程を指差し、再び歴史的コンテキストの中へ戻す作業に充ちている。古代ギリシア人の信仰世界が、その根底にある思惑と、細部に備えた奥行きと共に提示されたことで、立体的な歴史像へと再構成されたのだ。古代ギリシアに関わる者として、最も今日的な試みの中で「ギリシア宗教」が姿を現すのに立ち会うのは、喜びに堪えないことであった。